

コバヤシ伝説、健在なり

フィルハーモニックアンサンブル公演を終えて

盛田 常夫



伝説の始まり

ブダベストは「炎の指揮者コバケン」、小林研一郎の聖地。一九七四年に当地で開催された第一回国際指揮者コンクールで優勝して指揮者としてのキャリアを築いたコバヤシは、一躍ハンガリーのアイドルになった。そう、クラシック界のアイドルである。当時、娯楽の少なかったハンガリーで、ハンガリー政府が大枚叩いて開催した国際指揮者コンクール。西側から著名な音楽家を審査員として招聘し、国営テレビが4ラウンド一ヶ月にわたる長丁場のコンクールをゴールデンタイムでライブ放送し続けた。否が応でも、ハンガリー中がこの初めての国際行事を「喜一憂し」ながら観ることになった。欧米から参加した並み居る若手の指揮者を押し、東洋から来た「コバヤシ」が何と二次予選から最終審査にいたる4ラウンドすべてを第一位で通過するという快挙を成し遂げた。体操競技のように、二〇名の審査員が掲げる点数に国中が沸いた。この一ヶ月で、勝者「コバヤシ」はハンガリーの英雄になった。ガラコンサートはロビーまで溢れる超満員。まさにアイドル誕生だった。

クラシック界のアイドル

ポップミュージックがまだ普及していない一九七〇年代のハンガリーでは、音楽と言えはクラシックが民族音楽だった。オーストリアを中心とする中欧は世界

のクラシックのメッカだ。そういうメッカで日本人が活躍できる機会は非常に限られている。にもかかわらず、コバケンがデビューし、ハンガリーのクラシック界のアイドルになったのは何故か。

ハンガリーの誰もがコダライやバルトークが好きなのは、コバヤシの誰かがコダライやバルトークが好きだ。コダライ、モーツァルトが普及しているとはいい、ハンガリー人の平均的な歌唱力が高いとは思えない。余程、「カラオケ・メソッド」で鍛えられた日本人の歌唱力が高い。しかし、クラシックの世界に日本人がいくら歌謡曲やポップスの歌唱力があると言っても、クラシックの歌唱の世界ではハンガリー人歌手の足許にも及ばない。その差は理由もよくない。クラシック音楽の世界では、伝統のあるヨーロッパに肩を並べるのは容易でない。音楽家を統括する指揮者の世界になれば、尚更である。

そういう世界にあって、「コバヤシ」の登場はハンガリーのクラシックファンを一挙に増やしたと言われる。それほどクラシックに興味のなかったハンガリー人も、連日テレビに放映されるコンクールに釘付けになり、指揮の面白さやクラシックの見所が分かるようになった。それに加え、東洋から来た日本人が欧米の参加者を圧倒したことに、皆、驚嘆した。小林の計算し尽くされた動作、指示、即興に、これまでの音楽世界で観たこともない新鮮さを感じたのだ。そういう聴衆が大挙して、クラシックの世界に関心をもちようになった。それも「コバケン」という東洋の指揮者を経由して。クラシックのメッカに惹き起こした大衆革命だったのである。

まさに「コバケン」伝説の始まりである。既成の指揮者はコバケンの指揮の所作に違和感を抱きながらも、立合唱団と共演させている。国立オペも合唱団も定期的に日本公演を行っている。一九九五年には武蔵野合唱団が参加して、国立オペが「千人の交響曲」をスポンサーで演奏した。野村證券から三〇〇万円の支援をもらい、この盛大なシンフォニーを実現した。その後も、国立合唱団の渡航費用が不足したために、やはり野村證券に助けもらったこともある。こうやって、コバケンを通して、日本とハンガリーの演奏家の交流が行われてきた。

今回、小林が指揮したフィルハーモニックアンサンブルはアマチュアのオケである。もちろん、一口にアマチュアといつてもさまざま、立教大学オーケストラOBを中心とするこのオケには、N響をリイアした音楽家が各パートの首席に据わり、オケの顧問で現役のN響メンバーの井戸田さんがコントラバスを担当している。さらに、当地ではM.A.V.オーケストラからファゴット、チェロ、コントラバスの首席奏者が加わり、現地で活躍している若手のハンガリー人演奏家や日本人演奏家がサポートとして加わった。だから単純にアマチュアオケとは言えない。セミプロのようなオケだと言えよう。そこに、日本で募集された合唱団を国立合唱団が支え、ハンガリー人ソリストが全体を締めるといふ役割分担になっている。

チケットの売れ行きが心配だった。スポンサーや日本人社会へのチケット販売はそれなりに捌けたが、それだけではあの大々芸術宮殿は埋まらない。残りのチケットは演奏会のコーディネートしているM.A.V.オーケストラが販売し、これをコーディネート料としてM.A.V.オーケストラ財団が受け取る仕組みをとったが、どれほど売れているか心配だった。案の定、公演二週間前にチケットの売れ行きをインターネットでチェックしたところ、グラウンドフロ

アに三〇席の残席があり、2階3階席も五〇％程度の売れ行きだった。これは慌てた。もうコバヤシ伝説は生きていないのか。急にM.A.V.オーケストラからグラウンドフロア・チケット一三〇枚を買い取り、私が個人で各所に捌くことに決めた。ところが、チケットを引き取った翌日、当地の日報に「コバヤシ、再びブダベストへ」という記事が載った。これでM.A.V.オーケストラの電話は朝から鳴りっぱなしで、この日一日だけで一六〇枚の五〇〇F1券が売れ、グラウンドフロアが完売になった。このコンサートのことをコバヤシファンが知らなかったのだ。それから数日の間に残りのチケットが順次捌け、公演前にチケットは完売になった。

チケット販売の仕組み

チケットが完売されても、空席がなくなることはない。さまざまな理由で演奏会に来られなくなる人々が数%は必ず存在するからだ。他方、チケットが売り切れ状態でも、会場に行けばチケットが入手できるのを期待して来る人々（旅行者を含めて）がそれなりの数で存在する。ハンガリーではこの需給のアンバランスをうまく調整している。

一つは、学生の立ち見席（二〇〇F1）。開演一時間前に売り出される。購入には学生証が必要だが、購入してしまえば後はチケットを譲渡することができる。もう一つは、空席占有チケット。これは開演一五分前に売り出され、開演時間後から実際の開演までの短時間（五分七分間）に、空席があればそれを占有できるチケットである。このチケットでグラウンドフロアの空席は完全に埋まり、チケットを買えなかった旅行者の多くは学生券を融通してもらい、四階

の立ち席を占めた。

こうして、二階三階の空席を除き、芸術宮殿は下から上まで超満員になった。立ち席を含めると、二〇〇の入り口で、芸術宮殿がこれほど超満員になるのは珍しいことで、舞台裏の技術者たちも久しぶりのやりがいのある仕事に張り切っていた。まさに、「コバヤシ伝説健在なり」を思い知らせてくれた。

音楽家泣かせの芸術宮殿

二〇〇五年に完成した芸術宮殿は日本円にして三〇〇億ほどの資金を投入して建設された建築物である。二〇〇六年には建築のオスカー賞とも呼ばれるFIMACI Prix d'Excellence 2006を受賞した。このホルルの音響設計は多数の音楽ホルルの設計で知られるラッセル・ジョンソン率いるニューヨークの設計事務所「委託されたもので、申すまでもない近代的な音楽ホルルである。

しかし、このホルル、音楽家にはあまり評判が良くない。音響効果に問題があるから。我々が耳で聞く音のほとんどが、壁や天井から反響してくる音である。だから、音楽ホルルの設計にあたっては、音響効果のスイミューレーションが非常に重要だ。同じピアノでも、部屋の大きさや壁の材質によって、音がまったく違って聞こえるが、それは我々の耳に入る音の多くが反響音だからである。音楽ホルルの反響音は重層的なものだから、そのスイミューレーションは簡単でない。形状美を優先するが、音響効果を優先するから、ホルルの評価も異なってくる。

この芸術宮殿の大ホール（バルトーク国民コンサートホール）の上部の壁は開閉して反響音を調整できるようにになっている。舞台上部には反響用の天井が設置されている。こうした凝った設計でありながら、芸術宮殿では舞台から発せられる音のかなり部分が上方に発散していく。リスト音楽院と比較すれば良く分かるが、天井の高さが倍近い。オペラハウスの天井よりも高い。それも舞台上の天井が高い。こういう構造だと、上に延びる音は反響しないので発散してしまう。発散した音は人間の耳には聞こえない。

この状態は舞台にいる演奏家にも感じられるようだ。小林はこのホルルを初めて使った時から舞台上でオケの音が聞こえないと表現していた。今回もリハールでもっとエコーが効くように壁を動かさないかと尋ねていた。私自身、何度もグラウンドフロアのボックス席で聴いた経験があるが、ここからだと遠い舞台で演奏しているように聞こえる。音が響いて来ず、テレビの画像を観ているような錯覚に陥る。リスト音楽院の演奏会では、オケと聴衆がすぐに一体化できるように、芸術宮殿では一体感を得るのが難しい。打てば響くという感覚を得られないから、演奏家は困る。

もちろん、座席場所が違えば反響音も違うので、それぞれの場所ですべての響きに出会うはずだ。これまでの経験で言えば、グラウンドフロア席は比較的良好（二二列目から一九列目）が、両端にあるボックス席への音の伝導が鈍い。さらに、二階三階の正面席は最高の席であるはずだが、グラウンドフロアのボックス席のように音の隔離感がある。建築美として優れていても、音楽ホルルとして評価すると、二重丸という訳にはいかない。ワークナーやマラーなどの大編成のオケでもない限り、強烈な一体感を出すのが難しいホールだと言える。

コバケン・マジック

コバケンにとってベートベン第九交響曲は特別な

素。このどれもがないマジックは成立しない。こういう能力は真似してはできるものではなく、天性のものだ。

コバケン支援の意味

今回の公演にあたって、ハンガリーでは初めてコバケン公演のスポンサーを当地の日系企業にお願いした。それぞれの企業にスポンサーシップの方針や事情があるから、それがはっきり分る。



出来上がったプロのオケを扱うのは難しい。一応は指揮者の言うことを聴く振りをするが、本番では平気で指揮者の指示とは異なる自分たちの音を出してしまうことがある。それに比べ、アマチュアやセミプロのオケは指揮者が少し手を加えただけで変身する。合唱を組み合わせた曲であれば、その相乗効果は非常に大きい。演奏している音楽家たちが、その場で自分たちが一段も二段も飛躍できる感覚を得ることができると、指揮者はオケを変身させる醍醐味を味わうことができる。「指導し甲斐」があるのは、その音楽集団が「伸びしろ」を持っているからである。経験ある指導者が手を加えることで、「ハア」とする自己変身を遂げることが出来る。まさにコバケン・マジックの秘密はここにある。

誰かがコバケン・マジックを真似できる訳ではない。オケだけでなく、合唱を指揮できる能力、音楽家をうまくおたてながら自分の方向に持ってこられる能力、頃合いを見て叱りつけ求心力を発揮させるカリスマ要素。このどれもがないマジックは成立しない。こういう能力は真似してはできるものではなく、天性のものだ。

今回の公演にあたって、ハンガリーでは初めてコバケン公演のスポンサーを当地の日系企業にお願いした。それぞれの企業にスポンサーシップの方針や事情があるから、それがはっきり分る。

出来上がったプロのオケを扱うのは難しい。一応は指揮者の言うことを聴く振りをするが、本番では平気で指揮者の指示とは異なる自分たちの音を出してしまうことがある。それに比べ、アマチュアやセミプロのオケは指揮者が少し手を加えただけで変身する。合唱を組み合わせた曲であれば、その相乗効果は非常に大きい。演奏している音楽家たちが、その場で自分たちが一段も二段も飛躍できる感覚を得ることができると、指揮者はオケを変身させる醍醐味を味わうことができる。「指導し甲斐」があるのは、その音楽集団が「伸びしろ」を持っているからである。経験ある指導者が手を加えることで、「ハア」とする自己変身を遂げることが出来る。まさにコバケン・マジックの秘密はここにある。

誰かがコバケン・マジックを真似できる訳ではない。オケだけでなく、合唱を指揮できる能力、音楽家をうまくおたてながら自分の方向に持ってこられる能力、頃合いを見て叱りつけ求心力を発揮させるカリスマ要素。このどれもがないマジックは成立しない。こういう能力は真似してはできるものではなく、天性のものだ。

その躍動感溢れる指揮振りに感心し、素人の聴衆はクラシックの伝道者として「コバケン」を崇めるようになった。

それから三〇年

一九九四年、開業して間もないケンピンスキーホテルで、「小林研一郎ハンガリーデビュー二〇周年」を祝った。第一部では国立オペのメンバーがパートごとに余興演奏を行い、第二部では早稲田大学グリークラブを含めた「コバケン」一家の演奏が続いた。午後七時から深夜まで三〇〇名の熱気が場を占めた。この様子は五〇分のテレビ番組にまとめられ、繰り返しドゥナTVでも放映された。それからさらに一〇年、二〇〇四年一〇月、ハンガリー科学アカデミーの大講堂で、三〇周年を祝う音楽会を開いた。コチシュ率いる国立フィルのメンバーの他、国立合唱団、ハンガリーラジオ児童合唱団、当地で学ぶ日本人演奏家の自主参加や、日本商工会の支援も受け、盛大に祝われた。「コバヤシ」の名声のお陰で、当地の日本人や日本企業は有形無形の利益を受けている。そのことを考えれば、一〇年ごとにお祝いするのは当然のお返しのように思う。

ただ、三〇年も過ぎると、コバヤシ伝説がフェイドアウトしていく。一九七四年当時、小学生だった人々には、まだMTVに映し出されたコンクール風景を親とともに「喜一憂して観た思い出が残っている。しかし、それより若い人々はコバヤシを知らない。もちろん、親から語り継がれた伝説が生きているはずだが、三〇年も経てばもうハンガリーの半分以上の人があの熱狂を知らない計算になる。

これまで、小林は武蔵野合唱団、早稲田大学グリークラブなどのコーラスを率いて、当地で国立オペや国

